

沢庵宗彭における自己について

笠 井 哲

沢庵宗彭（一五七三—一六四五）の思想を問題にする場合に、従来「劍禪一如」のみに重点が置かれてきたように思われる。確かに彼には、柳生宗矩（一五七一—一六四六）に与えた『不動智神妙録』という書がある。この書は新陰柳生流劍術のみならず、柔術や槍術にも多大な影響を与え、江戸時代における武芸のバイブル的な役割を果たただけでなく、夏目漱石のような明治の作家にもその影響が及んでいるので、沢庵を「劍禪一如」のイメージで捉えるのは、自然なことであろう。

しかし、私が本稿で考察するのは、「劍禪一如」の思想的基盤、禅僧としての彼本来の思想は如何なるものであったか、ということである。本稿では、沢庵が達磨の作と伝えられる『少室六門集』の「第四門安心法門」を提唱した書である『安心法門』を中心に、『不動智神妙録』、『太阿記』等も参照しながら、彼の思想の核を探りたいと思う。

沢庵は、彼の生涯における艱難を媒介として、「我は我な

り」という「自己」の主体性を確立していったことを、晩年のある書簡において述べている。そういう沢庵にとっては、「自己」及び「我」とは何か、ということが中心問題となる。

まず、彼は『安心法門』において、「真」とは「自己」であり、「自己」とは「心」であるという。この「心」には「真心」と「妄心」とがあるが、真実の「自己」とは「真心」であり、「自性」であるとしている。また、「我」を「真我」と「妄我」とに分けている。「妄我」とは、地・水・火・風の「四大」が「仮合」した我々の身体のことである。これに対して「真我」とは、「妄身の内の一真主」であって、絶対的な主体としての「自己」ということができる。さらに「妄我」とは、妄執分別の主体として幻想される個人的・実体的な自我であって、この「妄我」のために、人は「道」を得ることができないとされる。

同様のことが『太阿記』においても説かれる。沢庵はこの書で、「我」を「真我の我」と「人我の我」とに区別してい

る。「人我の我」が個別的な「自己」であるのに対して、「真我の我」とは、「天地未分已前、父母未生已前」、つまりあらゆる思惟分別以前の普遍的な「自己」であり、一切衆生に備わる「仏性」のことである。そして、兵法を例にとつて、「敵、我を見ず」という場合の「我」は「真我の我」であつて、「人我の我」、個人我ではないとする。「人我の我」は、人が容易に見抜くのであるが、「真我の我」を見通すことができる人は稀である。さらに「我、敵を見ず」とは、自分は「人我」による物の見方をしないので、敵の「人我」による兵法を見ないということである。「敵を見ず」といっても、目の前の敵を見ないのではない。敵の姿を見ながら、その兵法を見ようとしないところに、妙用があるのである。

以上のように「自己」を捉えた沢庵は、自己と物との關係を如何に考えたのであろうか。彼は『安心法門』において、自己があるから、自己に對する「万法」があるとし、「万法」は皆「心」の所産であるから、「三界」はすべて「唯心」の所産であるという。すなわち、衆生が生死輪廻する欲界、色界、無色界の「三界」は、すべて「心」の現われであつて、「心」を離れて別に事物が存在するのではないのである。あらゆる存在は、根源的には「心性」の現われであり、「心性」こそ最高の實在なのである。

沢庵によれば、一切の「法」を見る「心」は、外界のもの

を分別する心、無数の煩惱、実体のない虚妄の心であつて、「本心」、「自性」ではない。一切の「法」を見るのは、皆「妄見」である。それは、自ら誤つて、向こう側に分別して見るのであつて、夢を見るようなものである。だがいつも決つた夢というものはない。起きている時の「見聞知」が念の上に残つて夢となる。これは、繩を蛇と見間違えるようなもので、「遍計所執性」といわれるのである。

このように、沢庵の考えは唯心的であつて、彼における「自己」と「物」との關係は、「自己の心」と「物」との關係であるといえる。しかし、沢庵はまた「万法歴然」というのであり、万物の存在それ自体は認めていると考えてよいであらう。つまり彼は、物の存在それ自体を否定しているのではなく、「心」との關係において在る「物」の姿を否定したのである。我々は、すべての人が同じ世界に生きているように考えがちである。だが各個人の生きる世界は、各々の関心との關係において構成されている。その関心の下で、自己の関心を持つ人や物の自己との關係における有様に、我々は一喜一憂してしまうのである。沢庵は、人は「万法」に迷うのではなく、「縛」に迷うという。たとえ眞實を知り、迷妄を破つても、なお「真」が残る。するとその「真」が却つて「心」を縛る。この「縛」が解ければ、物事に「自由」になるのである。

以上のように沢庵は、人間を束縛する最後のものは、「万物」ではなくて、「自己」であり、「自己の心」であると考えた。それゆえ、自己の心からの解放を目指し、自己とは何かを求める彼の思想は、自由とは何かを求める思想であるといえることができる。

沢庵は唯識の理論に立脚して、「識」とは「心王」であるという。「心王」は、心が認識対象のすべてをまとめる働きなのである。なお、身心関係についていうなら、心が身体を支配する生活と身体が心を支配する生活とを対比させて、人間を永遠に「六道」の輪廻に沈淪させる後者に対して、その輪廻から解脱させる前者の道を説いているのである。

また彼は、心の有様を「有心」と「無心」とに對比させている。「有心」とは心に物を留めることであり、「無心」とは心に物を留めないことである。『不動智神妙録』では、この「有心」は「妄心」であり、「無心」は「本心」であるといわれる。「無心」は「心」が一箇所に固定しないで、全身に行き渡っている状態なので、必要に応じて自由な働きをすることができるのである。

『安心法門』においては、認識論的観点から、人は「空」の立場を守り、しかもその「空」に留まらないようにすれば、「見」の呪縛から解放されて、自由になることができるとする。沢庵は、この自由の問題も『太阿記』においては、

武芸を例にとつて述べている。³⁾「真我」による兵法を使う達人にとつては、相手を活かすも殺すも自由自在であるという。とらわれのない自由な境地の人が、この理に至ることができる。とされる。

そして、このような自由の境地を得ようと思うならば、日常の立居振舞のうちに、油断して工夫を怠ることなく、絶えず「自己」に立ち返るようにすべきであるとされる。

こういう工夫を続けて行くうちに得られる「太阿の名剣」とは、実は「心」のことである。この「心」は、「不生不滅」であつて、「本来の面目」すなわち「本来的自己」ということができる。

このように、沢庵にとつて「自由」を求めることは、そのまま「自己」を求めることに外ならないのである。

1 拙論「孫子の兵法と新陰柳生流兵法」、『武道学研究』第21巻第1号、（日本武道学会、昭和63年）を参照されたい。

2 沢庵からの引用は、すべて『沢庵和尚全集』（同刊行会、昭和5年）に拠るが、一々の頁数は省略する。

3 拙論『相ぬけ』の思想について、『倫理学』第7号、（筑波大学倫理学研究会、平成元年）を参照されたい。

△キーワード▽ 沢庵、自己、自由